

俳句通信

特別作品25句 山本洋子「青葉木菟」

特集 物故俳人の句を読む①

藤田あけ鳥五十句	選・鈴木五鈴
戸田和子五十句	選・荒木 甫
斎藤梅子五十句	選・船越淑子
小宅容義五十句	選・森 章
倉田絃文五十句	選・松岡ひでたか

■ イタリア吟行① ナポリ
 ■ イタリア吟行② アマルフィ

【新作30句】

木内憲子 「蝶森へ」

【3人競詠20句】

村上喜代子 「風の鼓動」

宮谷昌代 「滝桜」

谷中隆子 「黄心樹の花」

【エッセイ】

新連載・兜太再見

「おおかみ」的なものをめぐって 柳生正名

●作品● 大牧 広・鈴木節子・遠山陽子・大高霧海・岸原清行・古賀雪江・菊地一雄・山元志津香・
 米山光郎・藤壱まさ志・森野 稔・山田六甲・小川晴子・細見造子・丹羽真一・
 菊田一平 ほか



WEP 俳句通信

104号

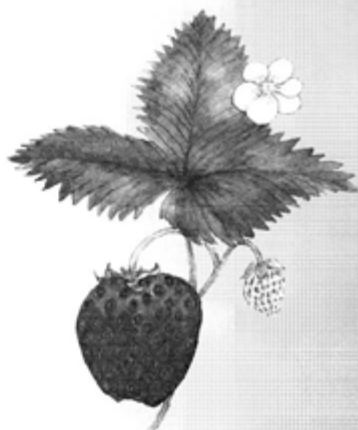


イラスト 田中丸葉子
デザイン 山口ミノ
編集 ウエップ編集室

特集 物故俳人の句を読む①

藤田あけ鳥五十句	選・鈴木五鈴	48
戸田和子五十句	選・荒木 甫	54
斎藤梅子五十句	選・船越淑子	60
小宅容義五十句	選・森 章	66
倉田絃文五十句	選・松岡ひでたか	72

特別作品 25句	山本洋子	
	「青葉木菟」	22

3人競詠 20句	村上喜代子	「風の鼓動」	126
	宮谷昌代	「滝桜」	128
	谷中隆子	「黄心樹の花」	130

新作 30句	木内憲子	
	「蝶森へ」	114

季節の名句 水母……………19

イタリア吟行①ナポリ・その他……………3
イタリア吟行②アマルフィ……………163

季節の中で⑧……………3

三宅やよい……………3

(東京都・武蔵関公園)……………10

書齋にて⑧……………89

森須 蘭……………89

(千葉県・八千代市)……………12

ウエップ・ブチット・ギャルリ⑧……………14

雲の旅⑦……………14

名村早智子……………14

(鮎・釣しのぶ・ボート)……………16

日本の祭り⑧……………16

細久手提灯まつり……………16

(岐阜県)……………18

作品16句

田中水桜	金蓮花	48
下鉢清子	上毛にて	30
大牧 広	更衣	32
鈴木節子	茅花流し	34
遠山陽子	河馬の仔	36
大高霧海	歴史の聲音	38
岸原清行	さくら	40
古賀雪江	暮春かな	42

珠玉の七句

菊地一雄	急霰抄	90
山元志津香	ロマンスカ	91
米山光郎	信玄の空	92
檜 紀代	つばめ魚	93
藤基まさ志	日矢一条	94
森野 稔	花曇	95
山田六甲	通草の花	96
小川晴子	花の雲	97
細見道子	六月のエレジー	98
丹羽真一	哲学堂	99
菊田一平	第九レース	100
広瀬恵美子	薔薇一輪	101

近詠7句

稲井和子	春遠し	139
長野真久	そこが空	140
金山征以子	ふくしま七年の後	141
木下克子	土匂ふ	142
波多野緑	春光	143
相馬晃一	鳥雲に	144
秋山しのぶ	花みかん	145
成井 侃	陰と陽	146

近詠7句

谷口摩耶	落城	147
吉住達也	紫陽花寺	148
和 田 桃	菜の花	149

エッセイ

先人に学ぶ俳句読	三橋敏雄(八)	26
俳句とともに③	「しだらでん」(四)	26
飯田龍太の風景	正岡子規について	44
新連載・兜太再見①	井上康明	44
「おおかみ」的なるものをめぐって	柳生正名	78
新連載・神蔵器を詠む②	第二句集『有今』の世界	84
新しい詩学のはじまり(十四)	金子兜太と沢木欣一	102
女性俳句を読む⑧	筑紫磐井	102
桂 信子	小川美知子	106
三橋敏雄「真神」考⑦	配列の検証 連句と連作	118
文学エッセイ 放浪のかたち⑦	北川美美	118
優しい魂の伝達者の死	酒井佐忠	124
藤田雅子第十句集「神楽」を読む⑩	「鷹老いぬ」	132
黒澤あき緒	深く静かな流れ2	150
存在する虚子	西池冬扇	150

現代俳句研究

WEP俳句通信102・103号より 鈴木五鈴 156

書評

西池冬扇エッセイ集「時空の座拾遺」を読む 矢野景一 160

仲原山帰来第一句集「冠羽」を読む 根橋宏次 188

超結社吟行

イタリア吟行記 波戸國旭五十句、ほか 176

超結社句会・新12番勝負

ゲスト 池田宏治・衣川次郎 191

高澤晶子・前北かおる

(ホスト 星野高士・藤本美和子)

「四睡会」報④⑤ 204

「花園句会」報④⑤ 205

「エッセーの会」報⑧ 206

結社推薦精鋭作家

遠矢 木村良昭・中村能乃子 183

鳴 田中裕一・伍島 繁 184

ひまわり 亀井 文・萩原陽子 185

あゆみ 高田健子・遠藤静魚 187

やぶれ草 橋本美代・齋藤朋子 188

■ウェブ俳句教室佳吟選 100

■インフォメーション 218

■編集後記 219

特別作品25句

青葉木菟

山本洋子

紋白蝶城山下の畑に舞ふ

逝く春の人影よぎる掛鏡

人惜しむことに相似て春惜しむ

安土・神学校セミナリオ

セミナリオ跡より早苗植ゑはじめ

馬酔木咲き砥石置きある岩の上

麦秋のせまる御城の異かな

特集 俳人故物 の 句を読む①

この20年近くの間には本誌とかかわりの濃い俳人が何人も世を去りました。

それら俳人がどのような句を詠み、どのような道を歩いていたか、を改めて読み、確かめてみたいと思います。それぞれの50句は、俳人と交わりの深かった人たちに選んでいただきました。

Napoli

イタリア吟行 1

ナポリ・その他

Fotografate di Kazunari Higuchi

「おおかみ」的なるものをめぐって

柳生 正名

今、兜太との「再見」の旅を始めようと思う。

「再見」とは再び相まみえる意である一方、中国語では別離のあいさつにもなる。二度と再び会うことのない永訣の時と分かっている、いや分かっているからこそ、人々はあえて「また会いましょう」と言葉を交わすのだろう。

青鯨忌泣ぐ子はみねがみんな泣く 正名

こう梅も盛りの候に詠み、はや2か月。桜もはるか前に終わりを告げた。今年の桜とはもう再び会うことのかなわないう寂しさと、また来年には花はほころび、咲くという期待の両方で心が揺さぶられる。今はそういう時節なのかと思ふ。

この、二度と会えないということ、一方でその作品や論や、何よりも生身の兜太の聲に多少なりとも接し、直截でありながら奥深く、複雑な人格と直接交わった記憶を通じた再会が可能なこととのあわいで、心から滲みだす震えのようなもの。それは、「再見」という言葉でこそ受けとめられる何かなのではないか。

大海の上の道のりとも言うにふさわしい、遙かな旅と

なるだろう。だからこそというべきか、その出発点は

おおかみに螢が一つ付いていた

という一句に焦点を絞りこみたい。「いきもの感覚」「産土」「アニミズム」「存在者」など後半生の兜太から生まれた一連の創作理念を集約し、具現化した作品であると考えられるからだ。「俳句四季」2017年11・12月号で組まれた特集「100人が読む金子兜太」では、8人が本句を挙げ、

暗黒や関東平野に火事ひとつ
水脈の果炎天の墓碑を置きて去る

の両句（7人選）をしのぎ1位に輝いた。兜太追悼号となつた「ウェップ俳句通信」103号での特集「兜太の一句」に寄稿した54人の中でも4人が取り上げた。これも

梅咲いて庭中に青鯨が来ている
人体冷えて東北白い花盛り
曼珠沙華どれも腹出し秩父の子

と並びトップだ。ある意味で平成期30年の俳句を代表する



前列右から 池田氏、高澤氏、衣川氏
後列右から 星野氏、藤本氏、前北氏

ゲスト 池田宏治・衣川次郎

高澤晶子・前北かおる

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集部 超結社句会第45回目です。ゲストは「ひいらぎ」同人の池田宏治さん、「港」副主宰の衣川次郎さん、「花林花」主宰の高澤晶子さん、「夏潮」同人の前北かおるさん、ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。
高士 では始めます。ご自分の句について言うときも、自分の句だと分らないように鑑賞してください。今日は5点句が2つあります。満票だと作者は分かっちゃってますけどね。ま、いいか。

尾根道はかつて往還朴の花

（次編の句）

次郎 「尾根道」を俳句にもつてくることってまずないので、どきつとさせられた。「かつて」だから、いまはそうでないということになるわけで、なかなか決まっているなど。好きな句です。

美和子 よく分かるし、「かつて」で、時間軸が見えてくるなと思います。「朴の花」も「かつて」で、昔も今も「尾根道」の歴史を見守ってきたような。そういう意味でちよつとすべて分かっちゃうので、分かる良さと、分かっちゃう物足